



赤い鳥は今も

企画 東京都豊島区
 制作 佛毎日映画社
 加ディナー : 真田健三
 脚本演出 : 奥山清
 撮影 : 藤枝則夫
 選曲 : 中村信也
 解説 : 岡和男
 上映時間 27分
 完成年月 平成3年1月

〔製作意図〕

大正7年、現在の豊島区目白で誕生し、わが国の児童文学史上に画期的な一時代を築いた童話童謡雑誌『赤い鳥』。

豊島区の歴史的・文化的財産ともいえるこの『赤い鳥』を、現在の視点で見つめ直し、時代や社会背景を超越したその意義を再認識する。

〔作品内容〕

閑静な住宅街として知られる豊島区目白。その町並の中で、中国の革命家孫文を援助した宮崎滔天の旧宅が異彩を放っている。また、情熱の歌人・柳原白蓮も、滔天の息子龍介の妻としてこの家で暮らし、その波乱に満ちた生涯の最期を静かに過ごしたという。

その目白で、大正7年7月、日本児童文学史の幕が開いた。児童文芸雑誌『赤い鳥』の誕生である。

「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある

純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起こしたい....」

『赤い鳥』は、当時すでに夏目漱石門下の逸材といわれていた鈴木三重吉が、その生涯を賭けた児童文学興隆運動であった。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」、新美南吉の「ごんぎつね」、北原白秋の「赤い鳥小鳥」、西条八十の「かなりあ」を始めとして、数限り無い童話童謡の名作を世に送り出したが、昭和初期に経営難から一時休刊。復刊はしたものの昭和11年、三重吉の死とともに『赤い鳥』も永遠にその翼を休めてしまった...

しかし、今。三重吉の理想を引き継ぐかのように活動する主婦たちがいる。「良い本を良い朗読で子どもたちに伝えたい」と10年近く朗読ボランティアを続ける『子どもの本を声で読む会』である。代表の高山訓江さんは「子どもたちの心を育てたいという私たちの願いが、三重吉先生の理想と相通じるものがあると思うと本当に嬉しくなります」と語る。

ビデオは、『赤い鳥』に情熱を燃やした鈴木三重吉の姿を、彼がこよなく愛した長女・すずさん、長男・珊吉さんの人間味あふれる談話と、貴重な資料をもとに描くとともに、その理想とした心の世界を朗読ボランティアの主婦たちを通して表現しようと試みた。『赤い鳥』鈴木三重吉の心は今も、ゆかりの地・豊島区で生き続けている...

